

ヨハネの手紙第一3章11-15節 「兄弟への愛」

1A 初めから聞いている使信 11

1B 主の命令

2B 初めの行いへの回帰

2A カインの道 12

1B 悪い者から出た者

2B 兄弟殺し

3B 自分の悪い行い

3A 世の憎しみ 13

1B 悪魔の支配

2B 用意すべきこと

4A 死から命への移行 14

1B 兄弟への愛

2B 死のうちに留まっている者

5A 憎しみという殺人 15

1B 内面の罪

2B 殺人者にならない救い

本文

ヨハネの手紙第一 3 章を開いてください、今晚の学びは 11 節から 15 節になります。まず、すべてを読んでみましょう。「¹¹ 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。¹² カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。¹³ 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。¹⁴ 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。¹⁵ 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。」

使徒ヨハネは、いわゆる「知識」とか「知っている」という言葉に騙されずに、兄弟を愛するということから離れている傾向を教会の中で見て、それに対して警鐘を鳴らしています。思い出しますが、何年か前の、日本のカルバリーチャペルのカンファレンスでヨハネ第一が選ばれて、私がここを話したことでした。そのまま、「愛さない者は死のうちにとどまっています。」というところを語り、「ああ、言ってしまった。」と言いました。これは、第一に、信じたら救われているという考えに一見、反することですし、第二に、教会の世界で事実、世にある憎しみというものが入り込んでいる現実を知っ

ていたからです。しかし、ヨハネはそれ以上にこの二つのことを知っていたことでしょう。それでも、このようにしてはっきりと語ったのですから、しっかりと耳を傾けないといけません。

前回、神から生まれた者は義を行い、罪を犯している者は悪魔から出ているということを学びました。そして、「3:10 義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」とありました。兄弟を愛さない者は、神から生まれてないということです。2章29節から、3章10節までは義を行うこと、罪を犯していることについて話していましたが、11節からは義を行うことの中でも、兄弟を愛することに特化しています。

1A 初めから聞いている使信 11

¹¹ 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。

1B 主の命令

ヨハネは既に、このことを2章で話していました。「2:7-8 愛する者たち。私あなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。8 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。」そして兄弟を愛することについて話しています。古い命令とは、神の律法の中に、自分自身のように隣人を愛しなさいというものであり、イエス様がそれを新しい命令として、ご自身が殺される前の晩に、こう言われたのです。「ヨハ13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」何が新しいのか？と言えば、イエス様が彼らを愛されたように、互いに愛し合うということです。その絆は、あくまでもそれぞれがイエス様に愛された、ご自身のいのちをお与えになるほど愛されたのだということを知って、その中に生きているから互いに愛することができる、というところにあります。ですから、イエスを信じて命を持つということと、兄弟を愛するということは、切っても切り離せないこと、ということです。

他の使徒たちも、主ご自身からの命令ですから、強調しています。ペテロはこう言いました。「1ペテ 4:7-8 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」パウロはこう言いました、「ロマ12:9-10 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。」

2B 初めの行いへの回帰

ですから、これが「あなたがたが初めから聞いている使信」ということなのです。ところが、使徒たちがこのような使信を出してから、時が経っています。この手紙をヨハネが書いた時は、紀元後90

年代です。パウロやペテロが手紙を書いたのは、紀元後 60 年代以前です。ですから、最後の使徒ヨハネが生き残っていますが、30 年ぐらい経ているのです。そこで、知識と呼ばれるものがたくさん入ってきました。そして、肉体を取られたイエスという現実味がなくなり、互いに愛するという教えも現実味を失いつつありました。90 年代は、ローマ皇帝ドミティアヌスによる激しい迫害が教会に対して起こっていました。その中で試みも受け、愛も冷えて行ったというのが現状です。

ですから、黙示録を見れば、よみがえられたイエスご自身がアジアの七つの教会に対して語られ、悔い改めるように語りかけられているのを見るのです。その第一が、エペソにある教会です。「2:4-5 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。5 だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」初めの愛に立ち返りなさいと命じられています。ヨハネも、このことを行なおうとしているんですね。

教会というのは、いつの間にか最も大事な戒めから、さまよってしまう存在なのかもしれません。あまりにも聞きなれて、もうわかっているということが、実は置き去りにした大切な真理なんですね。昨日も、今、混乱している世界の中で、キリスト教会は基本に戻ろうという記事を読みました。¹

2A カインの道 12

¹² **カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。**

1B 悪い者から出た者

互いに愛し合うことにおいて、カインが反面教師だよと言っています。ここでまず、ヨハネは、「**彼は悪い者から出た者**」と言っています。これは、8 節の「**罪を犯している者は、悪魔から出た者です。**」の続きです。これは、カインが文字通り悪魔から出たということではなく、彼が弟アベルを殺したのは、悪魔が初めから人殺しであり、その思いを成し遂げたということでもあります。言い換えれば、彼は神のものとなっていなかったのも、悪魔に誘われるがままになっていたとも言えます。

創世記にある話を思い出しましょう、4 章 1-8 節を読みます。「¹ 人は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、主によって一人の男子を得た」と言った。² 彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。³ しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来た。⁴ アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。⁵ しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。⁶ 主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。⁷ もしあなたが良いことを

¹ <https://providencemag.com/2021/01/christians-politics-back-basics-us-capitol/>

しているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」⁸ カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。」

これを読むと、第一印象として、神がアベルに対してえこひいきしているのではないかと見えます。カインの妬みは理解できる、とみなすかもしれません。けれども、前後関係、文脈を見ないとはいけません。この出来事は、アダムが罪を犯して、神が呪いを宣言した後のことです。神は、「創3:18 大地は、あなたに対して、茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。」と宣言しておられました。そして、彼らが裸なので恥ずかしいと思っていたのですが、神が、「3:21 アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」とあります。土地から労して出て来るものが、呪われたものとなった一方で、皮の衣と言っていますから、動物が屠られて、犠牲の血が流されたのです。ここで神が、罪を犯した者に対して、その罪を覆う方法を確立されたのでした。身代わりに流される血です。神が、善悪の知識の木からの実を食べるなら、必ず死ぬと言われました。罪を犯す報酬は死なのです。その身代わりに血を流す命があり、その犠牲によって近づくことによって、神が罪をお赦しになります。

そこで、どちらも神の前に供え物、あるいはいけにえを献げています。カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来ています。自分は耕す者で、その行ったことを神の前に持って来たのです。しかし、土地から出て来るものは呪われており、自分の行いによる結果は、神は受け入れないのです。けれども、アベルは、犠牲の子羊を献げました。神が願われていた、血を流すいけにえです。しかも、アベルは最も大事な初子から、しかも肥えた最上のものを持って来ました。ヘブル書 11 章 4 節には、「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。」とあります。神から与えられていた、罪の赦しの道信じ、それにしたがっていけにえを献げたのです。カインは、自分の正しいと思う道を選んだのです。どちらも献げ物をした、というところが味噌です。自分が教会の者だと言っても、信仰によって動かなければ、ただ自分自身から出て来るもので献げているということになるのです。

そして信仰によれば、それは良い行いが出てきて、御霊によります。行いによれば、それは良さそうに見えても悪い実しかでてきません。そこに妬みが起こります。神から出ていない者が、神から出た者に対して妬み、迫害をします。その歴史がイエス様の時にも続きます。「マタ 23:35 それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。」イエス様を殺したのが、他でもない神に熱心なはずの宗教指導者であったのであり、それは彼らが得ていないものが、イエス様にはすべてあり、神からの方であることを認めざるを得なかったからです。信仰をもって、この方が神から来られたと受け入れれば、その恵みが自分のものとなり、平安に満たされるのですが、それを拒んだので、ただ脅威にしかならず、迫害し、殺害にまで至ったの

です。それが、使徒たちの時代にもユダヤ人が彼らを妬んで迫害し、殺していきました。そして教会の中でも、信仰によらず動いている者たちが、信仰による者たちを妬み、憎むということをしてしまうのです。

2B 兄弟殺し

ところで、カインの悪は、弟を殺したことです。血のつながっている弟を、殺しました。当時のユダヤ人指導者らは、神の御子を殺したということで、それは正しい方を殺した罪ということで、冒瀆の罪というか、大きな罪です。ここでは兄弟殺しです。自分と血によってつながっている者たちを殺していることは、自分の分身を殺しているようなもので罪深いのです。もちろん、誰を憎んでも罪深いです。どの人も神のかたちに造られていますから、ある人を憎むことは、ある意味でその人を造られた神を否定することにつながります。その人がいなくなってほしいと願うのは、その人を置かれた神ご自身の主権を否定しています。それに加えて、神によって、キリストの血が注がれて一つとなっている兄弟を憎むことは、神ご自身のみならず自分自身を否定するようなものです。現代の風潮、個人主義によって、「自分は自分、あなたはあなた」としているために、そんなことはないと思っているかもしれませんが、キリスト者としての自分を痛めつけているのだということを知らないといけません。

3B 自分の悪い行い

そして、「**自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったから**」とヨハネは言っていますね。多くの人が、このカインとアベルの話を見て、不公平だと感じるのですが、そんなことはありません。怒って、落ち込んでいるカインに対して神は、「**7 もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。**」と言われたのです。カインは、自分が罪を犯していると分かっていたのです。自分が、適当に自分のものを神に献げたことを知っていたのです。だから、その罪を悔い改めて、何とかしないと罪があなたを支配するようになると、神は警告されました。ですから、自分の行いが悪いことが分かっていたのです。

そして、アベルの行いは、神の言われたことに信仰によって応答しているものですから、正しい行いだったので。ここで兄弟を憎むというのが、妬みからであり、また自分の悪い行いが、正しい行いによって明るみに出されていることが分かります。その人を憎んでいるのではあく、自分の悪がその人からの光によって明らかにされてしまうからです。

3A 世の憎しみ 13

13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。

このことも、イエス様が語られていました。「ヨハ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたが

たよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」神からの方なので、光によって闇が明らかにされるのを恐れて、それでイエス様のところに来ません。そして、イエス様のところに来ないので、イエス様を憎みます。けれども、イエスのものとされた者たちも、世は、イエス様を憎んでいるので、憎むのです。

1B 悪魔の支配

なぜならば、世は悪魔の支配下にあるからです。「5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」神に属していないということは、世に属しており、世は悪魔の支配下にあります。悪魔は、神を憎み、神にもものとされた者たちを憎んでいます。何とかして、自分のほうに引きずり込もうとしています。

2B 用意すべきこと

ですから、世から憎まれるということは、ある意味で当たり前のこと、驚くべきことではないということです。確かに、私たちは世から圧迫を受けると、とても辛い思いになります。けれども、それは驚くべきことではないのです。そうなるべくしてなっているのです。ペテロも同じ勧めをしました、「1ペテ 4:12-13 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけません。13 むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。」

しばしば、世がこういう悪いことをしているといきり立って起こっているクリスチャンがいますが、世とはそもそも、このようなものであるとみなしていくべきで、だからこそキリストが来られたのであり、御子を信じる信仰こそが、世に打ち勝つ力です。世から憎まれても驚くべきことではありません。

4A 死から命への移行 14

しかし、兄弟と呼ばれている者が兄弟を憎んでいるのなら、話は別です。「¹⁴ 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。」

1B 兄弟への愛

ここの、「自分が死からいのちに移った」というのは、イエス様がご自分を信じる者がそうなりと語っておられました。「ヨハ 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」イエスが神から来たと言信じる者は、永遠の命を持っていると言われている

す。死から命に移っている、というのは、救われたということです。罪の中で死んでいたのが、よみがえられたキリストと共に生き、新しい命を与えられたということです。

そして、ヨハネが「**兄弟を愛しているからです。**」と言っているのは、原因ではなく結果です。信じて救われた者は、兄弟を愛していることによって、その救いを確認できるということです。聖餐式は、そのことを物語っています、同じ、裂かれた肉を食べ、同じ流された血を飲み、それをもってキリストにあって一つにされました。神の家族の兄弟となり姉妹となりました。兄弟を愛しています。

私たちはここで原点に戻る必要があります。「Iヨハ 1:3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」私たちというのは、使徒たちが教える健全な教えに立ち、それを堅く守っている中での交わりです。それは、御父また御子イエス・キリストとの交わりであり、共有しているのです。こういった共同体、一体にされている私たちなのですから、キリストにある相手を見る時に、自分のキリストを見るのです。イエス様は、私の主であると同時に、私たちの主なのです。ですから、兄弟を愛するというのは当然なのです。

2B 死のうちに留まっている者

したがって、愛していない者は、そのいのち、交わりにあるいのちを全否定しているのであり、その交わりそのものにいるのかどうか、怪しくなってきます。それで、「**愛さない者は死のうちにとどまっています。**」と言っているのです。

ここで憎むということを考えてみたいと思います。何か、誰かが嫌いだということは、もちろんあります。その感情は捨てることは大切ですが、しかし、ここで憎むというのはそういったレベルのことではありません。「レビ 19:17 心の中で自分の兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならぬ。そうすれば、彼のゆえに罪責を負うことはない。」憎むのではなく、戒めなさいということです。つまり、意見が合わず対立することは憎むことではありません。むしろ、そういったさえも拒み、その人を行いにおいて憎んでいることでしょう。

知識において、言葉において欺くことができます。愛しているけれども、と言って、本当は嫌いなのに愛していると言って、自分のしていることを正当化していく…。これこそが、ヨハネがこの手紙で強調している、欺きです。言いながら、行っていることが違うのは偽りで、真理を行っていないということです。自分が確かに相手を憎んでいると認め、闇の力に加担していることに気づき、悔い改めることが先決です。

5A 憎しみという殺人 15

15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永

遠のいのちがとどまることはありません。

1B 内面の罪

強い言葉ですが、これはイエス様の言葉に裏付けされています。「マタ5:21-22 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」内面で、その人はいなくなっただけと願っていたら、または、馬鹿と呼んで、その人格を否定するようなことが起これば、それが殺人へとつながるのです。この直接的な関係を偽って、心に憎しみを抱きながら自分は、いのちを持っているとするのは偽りです。

イエス様が、ユダヤ人たちと激しい口論になった時に、彼らが悪魔の子供だと断じたのは、すでにイエス様を殺そうとする殺意があったからです。そして事実、イエス様を殺しました。ここに恐ろしさがあります。世には憎しみがあります、ヘイトがあります。相手を簡単に馬鹿と呼び、人格を否定します。しかし、私たちは世から分かれ出たものです、聖なる国民です。そのような憎しみからも救い出されたのです。(テトス 3:3-5 参照)

2B 殺人者にはない救い

そして明らかなことをヨハネは言っています、「**だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。**」と言っています。人を殺してはならないと、神は命じられました。そして、戒めによって生きて、いのちを得ることを神は律法の中で言われました。ですから、人を殺す者にはいのちは留まっていません。私たちは、御子を信じる者はだれでも永遠のいのちを得ることを知っています。しかし、いのちを得ている者が、人を殺すこと、人を憎むことは相いれないのです。信仰者ではなく、世の人となってしまうのです。

人の命を取るのではなく、人のために命を注ぐことが、愛であり、それについて 16 節以降にヨハネが語り続けます。